〔紹　介〕

19世紀アメリカの住宅の歴史

小　澤　治　郎

はじめに

本稿は19世紀のアメリカの住宅の発展を辿ることを目的としている。住宅を歴史的に見るということは色々の意味をもつと思われる。建築用地の入手，建築資金入手の方法，建築の方法，そして住宅での生活の方法などである。それは住宅に住む人々の歴史であり，ある意味で社会史であり，アメリカの場合も高級住宅，中産階層住宅，下層階級住宅はそれぞれ上流，中流，下層社会の生活史の反映である。それらがその相互間の関係を含めて19世紀の初期から後期に至るまでどのように変っていったかを見ることが住宅の歴史を見る場合の一つの視角である。この時代のアメリカ史を見る場合の最大のメルクマールは工業化であろう。それは世紀前半期の産業革命的段階から後半期の重工業段階へと進むのであるが，直接的には家の建築方法に工業化が反映されること，間接的には住民の生活が工業化によって変化してくるという形で現われた。労働の条件や場所は工業化によって変ってくるし，衣，食，住すべての分野に工業化の影響は現われた。

これらの変化が集中的に現われるのが都市化である。19世紀初期に全人口の約1/9を占めた都市人口は1860年に約1/4に達し，世紀末に約1/3に達する。(1920年に約1/2に，1980年には約3/4を超える。)都市化は種々の要因の集りであるが，住宅に関して見ても都市の住宅は変化の先頭を切り，とくに東部の大都市の富裕者層の住宅は全国の住宅の変化の最尖端の位置を占め続けた。大きく見てアメリカの住宅は19世紀前半期の農村型住宅が支配的な姿から後半期の都市型住宅主流へ変るのであるが，これは社会全体が農村型から都市型へ変っていく傾向を背景としており，この都市化傾向は20世紀に入ってからも続くことから歴史研究の一つの重要な分野であることは否定できない。

都市史の最近の発展はめざましい。一般的通史もかなり揃ってきたし[1]，個々の都市の歴史研究もかなりの数にのぼっている。もはや整理するのが容易でない状況に達しつつあるが，本稿は都市化，工業化を中心としたアメリカ人の生活の歴史をまとめた最近の研究を要約することによって今後の研究への出発点とすることを試みた。それは世紀初頭については，Jack Larkin, *The Reshaping of Everyday Life, 1790-1840.* 1988. であり，世紀中葉については Daniel Sutherland, *The Expansion of Everyday Life, 1860-1876.* 1989. であり，世紀末から 20 世紀初頭にかけては，Thomas A. Shlereth, *Victorian America; Transformations in Everyday Life, 1876-1915.* 1991. である。

いずれもこの時期のアメリカ人の生活を扱った研究であるが，本稿はそのなかの“住宅”の章だけを要約したものであり，他の生活の分野との関連は今後の課題としたい。なおこの要約は精しく紹介した部分もあれば，省略した部分もあり，筆者の主観に左右された要約であることを断っておく。

〔註〕

1) 重要なものをあげると，

Howard P. Chudacoff, *The Evolution of American Urban Society.* 1975.

Charles N. Glaab and A. Theodore Brown, *A History of Urban America.* 1967.

Edward C. Kirkland, *Industry Comes of Age.* 1961.

Blake McKelvey, *The Urbanization of America: 1860-1915.* 1963.

Bayrd Still, *Urban America: A History with Documents.* 1974.

Robert H. Wiebe, *The Search for Order, 1877-1920.* 1967.

Maury Klein and H. A. Kantor, *Prisoners of Progress: American Industrial Cities. 1850-1920.* 1976.

I.

まず Jack Larkin, *The Reshaping of Everyday Life, 1790-1840.* 1988. Chap. 3. Comfortable Habitations, Houses and the Domestic Environment. pp. 105-144. によって 19 世紀初期のアメリカの住宅の状況を概観する。

この時期には専門的建築家によって建てられた住宅に住むことができた人の数は少なかった。農民や定住者たちの多くは自ら自分の家を建てた。かれらは徐々に増えつつある職人的大工たち（1850 年には 20 万人がいた）に指導され，それを見習

い，真似ながら建築の技術を学んでいった。ほとんどが木造で伝統的なイギリスの技術を基本としていた。西部や南部ではより単純でより労働を要しない丸太住宅 log house が選ばれた。それは丸太を水平に積み重ね，隅のところは切り込みで組み合せる方法であった。

1830年代からシカゴでバルーン・フレーミング方式が現われた。それはほぞ穴などによらず，釘で結合する方式で，建築に要する時間は従来の方法よりはるかに短かく，より小さい木材も利用できたことからより安価であった。この方法は西部から東部に拡がり，さらに再び田舎へ広がり，19世紀末には主流の建築方法となって従来の伝統的な木造建築や丸太小屋方式はほとんど姿を消した。

19世紀初期の数十年間の家のほとんどは現在の感覚からすればみじめなもので，東部の大商人たちのしばしば数万ドルを要した3階建ての邸宅は例外的存在で，1798年の課税調査では全住宅の40パーセントは100ドル以下であった。東部のマサチューセッツ州などでは，かなり上等の煉瓦作りの家から，一部屋の丸太小屋まで多様であったが，一般に2～3室の家が多かった。2階建ては稀で，ほとんどが1階建てで，縦20，横24フィート，あるいは縦20，横18フィートの広さで，3～6の窓をもっていた。南部の家は台所を別棟にする習慣であったことを考慮しても，大農場の邸宅は別として，一般に小さかった。1798年に6～7室の700ドル以上の家に住んでいた人は10人に1人であった。それらは都市の表通りか，大農場に限られていた。都市でも一般的であったのは1～2室の，縦14フィート，横17フィート以下の広さのテナメント（安アパート）であった。南部の奴隷たちの住居は都市や辺境の最下層並みで，縦12フィート，横15フィートから10フィート平方の広さの部屋にしばしば2家族が住まわされ，大農場の家庭内奴隷は離れた台所用の建物で過すのが普通であった。

19世紀の前半期に住宅は全国的に改良されていった。その面積は広くなり，丸太小屋に代って木造住宅が増え，2階建住宅が増えた。たとえばマサチューセッツ州シャーリーでは2階建住宅は1798年の1/3から1832年には半分に増えた。また一つの住宅に数家族が住む傾向は減った。1住宅に1家族が住むのが支配的になった。もっともニューヨークを始め，大都市の労働者街では一つの家に2家族，3家族が住む傾向は強まった。一般に住宅の格差が拡がった。とくに大都市では裕福な住宅と貧困な住宅の差が拡がった。1840年代以降，短期間で組み立てる建築技術と標準型の普及，大量生産方式と設備や家具をカタログで注文する方式のため，ア

メリカの住宅建築はそれまでの時期の地域による特色を失って，全国的に画一化する方向に向った。かつてジョージア方式といわれたギリシャ，ローマ建築の流れを組む方法は，独立戦争後フェデラル型と呼ばれていたが，かつては富裕者だけのものであったこの方式が若干姿を変えながら一般家庭に普及していった。ボルチモアやフィラデルフィアのような大都市では煉瓦造りの連続住宅が並び始め，ニューイングランドの工場地域でも，2～4階建ての煉瓦造りの労働者用下宿が登場した。

当時多かった1部屋住宅では一つの部屋のなかですべての家事が行われた。入口から一番遠く離れた隅の炉辺で料理作りと飲食がなされ，他の隅には寝台があり，その反対側に時計や椅子が備わった坐るための場所があった。夜はろうそくやランプしか利用できなかったため，炉の周りに人々が集りがちで，人々は群って行動し，時間を過すことに慣れていた。若干富裕な家はいくつかに分れ始め，飲食や家内作業，ときには睡眠や料理にも利用された広間 hall の他，parlor または chamber と呼ばれた主人夫婦の寝室が現われた。その他若干の分化が現われるが，子供たちは同性同士集って，ときには当時かなりしばしば見られた使用人たちと一緒に寝るのが普通であった。宿屋ですら一つのベッドに2人寝ることは普通に見られた。これも富裕階層から，主人夫婦以外の寝室 bed-chamber が現われ，飲食や社交のための部屋も若干独立し始めた。そして客用，装飾用の日常生活から切り離された部屋も登場し始めた。

かつては木片，材木，板，がらくたが散らばり，豚が歩き廻っていた家の周辺も整備され始めた。炉の外側が外に露出し，道路は汚く，納屋小屋が近接していた19世紀初期の一般住宅は窓のカーテンもなく，夏には蝿が群れ，黒人やアイルランド人の家は犬，猫の外，豚，家禽を飼ったため，それは悪臭に満ちていた。当時あらゆる仕事を手仕事でこなして忙しかった主婦たちの間には残飯を豚やにわとりに食べさせる習慣もあった。一般に大多数のアメリカの家庭では，家の周辺は労働のための場所と考えられていた。

徐々に北東部の家庭から戸口や家の周辺を清潔に保ち，柵を作ってペンキを塗る習慣が始まった。残飯や汚物用のつぼが用意され，大量生産され始めたほうきの登場がほこりをなくした。北東部の家の近代化が進んだ結果，1830年代ごろには北東部と西部や南部諸州の家庭の雰囲気はかなり違ってきた。南部のプランターの家ですら，北東部の中流家庭よりはるかに時代後れに見えた。

この頃の一般家庭の変化は相当なものであった。家具類，寝台，食器類の質は向

上した。商業網の普及により，家庭用道具類の価格が下り，一般人も家庭内消費に関心をもち始めた。冬の寒さをしのぐための炉の改良，木材ストーヴ，石炭ストーヴの導入が北東部から始まった。ろうそくに代って，油ランプが普及し，床や窓も改良され，カーテン，じゅうたんが見られるようになった。姿見の鏡が普及し，椅子，安楽椅子も各部屋に配置され始めた。この背景にはガラス，椅子の大量生産があった。（標準的な椅子は30～75セントで買えるようになった。）ベッドも藁製から羽毛製に変り，ソファも登場し始めた。健康上の理由から窓は広くなり，その数は増え，ストーヴも料理用，客間用に分化し，これまで暗かった台所は料理用ストーヴを中心に明るくなった。30年代の鯨油ランプの普及によって夜も明るくなった。高価なアストラル・ランプを備えることができた裕福な家は夜も昼間の明るさをえたが，これも30年代にフィラデルフィアを先頭に現われたガス・ランプは都市の夜を一変させた。もっともこれらの変化とは関係がなかった貧困者家族も多く，これらは従来のせまくるしい部屋と暗い夜の生活を続けた。

高価なじゅうたんに代る“ラグ・カーペット”も現われ，安価な工場製の窓カーテンも現われた。これは外からも見える装飾であったことから急速に普及し，これも工場製の壁紙も雑貨店ゼネラル・ストアでよく売れる商品になった。壁にかける絵も，印刷の発達とともに政治家の肖像画や風景画が現われ，鏡も各部屋に見られるようになった。これも大量生産のイギリスの陶器類や世界各地の印刷された皿や食器類が登場した。大量生産の時計の普及も早く，1830年代には約半分の家庭で見られた。職人や農民などの中流家庭ではこれらの新しい品物がすべて見られたわけではなかったが，その家は以前に比べて部屋数が増え，明るくなった。都市の下層民や奴隷たちは以前と変らぬ生活を続けた。奴隷の場合はほとんど家具のない生活であり，都市の下層民は藁のふとんでほとんど従来通りの生活であった。家族全員が一つの部屋で，夜は照明もなく，椅子すら不充分な生活を続けた。

この1790—1840年の時期には，多様な生活ぶりが見られた。若干のアメリカ人は“文明の進歩”といわれたものを享受し始めた。一方，奴隷，労働者，農民や職人の一部は従来と変らぬ生活を続けた。片や豊富化と，片や窮乏生活の間で，生活は楽になりつつあったが，社会はより不平等なものになり始めた。一般的にのちの時期と比べて1軒に同居人も含めて大家族が住む傾向が強かった。

II.

ついで Daniel E. Sutherland, *The Expansion of Everyday Life, 1860-1876.* 1989. Chap. 2. Houses, Homesteads, and Hovels. pp. 27-52. Chap. 3. Life at Home. pp. 53-78. によって 1860—76 年の時期を見る。

この時期のアメリカ人の住居は前の時期の傾向を受け継いで，上流，中流社会では急速に近代化し，充実しつつあった。しかし，労働者層，下層階層では自らの住居をもてず，アパート，下宿，借家で暮さなければならない人々も多かった。1890 年には 48 パーセント（都市では 37 パーセント）だけが住居をもっていた。1870 年には貧しいヨーロッパ移民がまだ流入していなかったので，そのパーセンテージはより高かったと思われるが，それでも持ち家がない人の比率は高かった。1870 年代に中心的存在であった中流下層の年収は 750～2000 ドルであった。家の価格は住人 5 人程の 2 階建てで 5000～1 万ドルであった。年収 2500～8000 ドルの層の人々は楽に家を建てることができたので，この人たち向けの建築に関する雑誌が 60 年代，70 年代に氾濫した。年収 2000 ドルの人でもブルックリンに 2 階建ての家を建てることができるとされた。バルーン・フレーム式の家はかなり安価になっていた。工場製の釘を使い，製材所で作った桁，柱，梁，たるきを使うこの方式は，従来の職人による本格的建築より 40 パーセントも安価であった。半ばプレハブ式で鉄道，蒸気船で運ばれたことからメール・オーダーでも注文でき，数百ドルのものも現われた。

1860—70 年代のアメリカの建築様式は多様であった。古いギリシャ，ゴシック様式からルネッサンス，フランス，イタリア，アジア，ムーア風までの行列であった。“けばけばしい”と批難された渦巻模様や多くの色が使われるが，当時の典型的な中産階層の家は，パブリック・ルーム，個室，仕事部屋に分れていた。パブリック・ルームは客間（パーラー），家族用の部屋，食堂，ホール・ウェイ（入口の廊下）に通じていた。個室は普通 2 階にあって，寝室，浴室，便所であった。仕事部屋は台所，食糧貯蔵室，地下室であった。もっとも高価な家具や調度品が置かれたフロント・パーラーは客間用に使われ，彫刻されたテーブルや本棚，ガス・シャンデリア，ピアノが備えられ，絵や花瓶でかざられていた。食堂はフロント・パーラーに次ぐ正式の部屋で，家族の人々はセコンド・パーラー（バック・パーラーとも言っ

た）で日常を過した。そこには各種の椅子があり，新聞，雑誌や遊び道具があった。寝室はベッドと便器と洗面台を備え，とくに婦人にとっては自らの部屋であった。この頃の寝室は窓を二つ備え，清潔になったが，まだ浴室のある家は少なく，水道がまだ普及していないので熱湯は台所から運ばなければならず，土曜の夜に入浴する習慣はまだ定着していなかった。排出については，下水設備が70年代に大都市の一部に見られた程度であったので，昼間は戸外の便所へ通い，夜は携帯便器を使うのが一般であった。石炭ストーヴは60年代に中産階層の標準的装備品になっていたが，台所の料理以外にはバック・パーラーに一つ入っている程度が多かった。家具は工場製が支配的になってきていた。上流階層は伝統的な職人の作った家具を使い続けたが，中流階層では工場製の各種の新しい家具が使われ始めた。ベッドに転換できるソファやテーブルに転換できるベンチなどが登場してきた。リクライニング・チェア，折りたたみ椅子，ロッキング・チェア，廻転椅子などが家の内外に配置された。台所も変った。南部では別棟に，西，北部では地下に配置されていた伝統は崩れ，1階のパブリック・ルームの後へ移動した。地下室は洗濯室，貯蔵庫，使用人の居所になった。鋳鉄製の料理用ストーヴが，むき出しの炉に比べて時間と労力を節約した。

レンジが食物を焼いたり，蒸焼にしたり，煮る仕事をしただけでなく，洗濯，入浴，掃除用の湯を沸した。屋内に水道施設が導入されたところでは温水設備も生れた。木製の，錫か亜鉛で内張りした“冷蔵庫”が普及し，氷の供給組織も生れた。錫製の台所用の汚物溜めも普及したが，これはまだ人が屋外へ運んで処理しなければならなかった。その他当時の台所は仕事台，少数の椅子，ゴミ・バケツ，食器棚があり，棚には食料品を混ぜたり，保存するための土器，木器具，鍋やフライパンなどの鉄製品，焼くのに使う錫製品などが並んでおり，香料やひょうたん，ときには肉が天井や壁にぶらさげてあった。貯蔵室にも（まとめ買いした）小麦粉や砂糖，保存処理をした果物，野菜や缶詰が並んでいた。

農家には色々の程度があった。2～8の部屋をもった2階建ての家は都市の店員や小店主と同じような暮しであった。もっとも家具類はより粗末であった。いくつかの先祖伝来の家具や一つか二つの工場製の家具のほかは荒けずりの家具で，食事は台所でなされた。客間か居間かどちらか一つしかないのが普通で，客間を備えた場合，家族全員が台所で生活することになった。照明は石油ランプで，浴室や便所があるのは稀であった。貧しい人々の間では，都市の下層民の場合にも見られた

が，手製の丸太造りの家も多かった。鉄道が利用できた場所では木材や建築資材が運びこまれたため，伝統的な丸太造りの家が少なくなったが，それ以外の地域ではまだ丸太小屋が主流で，カンザスやネブラスカでは芝土の家や穴蔵式の家も多かった。これらは安価で手軽に作ることができたが，雨もりをする場合が多く，一般に暗く，むさくるしくて一時的使用のものが多かった。

さて都市は人口が増すにつれて騒がしく，混雑し，汚く，危険で住むのに費用がかかる場所になってきた。普通の連続住宅でも家賃が1年に数百ドルになり，土地価格の高騰のため，都市内に住宅をもつことは富裕な人々にだけ許されるぜい沢になってきた。4人家族が2エーカーの土地と広い家を6000ドルで買える郊外へなぜ移らないのかと多くの人々が考え始めた。“混雑した通りで狭い家に住んで，広い空も，日没，夜明けの地平線も見えなくなり，草の生えた芝生も，波うつ木の葉も，香ばしい花の堤もないよりも”，郊外で住むほうがどれほど快適であろう。昼間の激しい労働のあと，夜は“休息の港”で過すことが流行し始めた。建築家たちは自然と家庭を調和させる工夫を始めた。窓は大きくなり，数が増えた。たれ下る植物，苔，鉢植の羊歯などが登場し，鳥の巣が作られた。ポーチやヴェランダが大きくなり，そこには滑り台，ぶらんこ，安楽椅子などの家具がおかれた。夏にはポーチで食事がとれる用意がなされ，虫よけの網も登場した。都市の人々もこれに影響されて公園を求めるようになった。ニューヨークのセントラル・パークやフィラデルフィアのフェアモント・パークに刺戟されて，各都市で公園作りが流行した。工場，製材所，鉄道などの地域と住宅地域が区別され，商業，金融の中心地“ダウン・タウン”も生れ，片や下層階層の住宅地域としてスラム街が形成され始めた。上流，中産階層はますます郊外へ移っていった。都市の階層別分化がすすんだ。

都市内で住み続けた人々はより窮屈な住居で辛抱しなければならなかった。連続住宅が大都市に拡がった。高くて，入口が狭く，同じ家が立ち並ぶ“本棚の本のような”家の行列が延々と拡がった。その欠点は階段が多いことと閉所恐怖症的な配置であった。下宿も増えた。19世紀には全国民の70パーセントの人々が人生のある時期に下宿住いを経験したといわれる。都市の20パーセントの人々が下宿人をおいていた。下宿人の主流は独身者や結婚して間がない人々で，下宿を営んだのは女の人たち，とくに寡婦たちで，高級から下級までさまざまな住宅と設備でこれを経営した。

上の両者の中間的存在としてアパートも急成長した。南北戦争前から若干見られ

たこの方式は，60年代以降ニューヨークを始め，各大都市で急成長した。当時は高級なものが多く，独立した家庭生活を享受できたこの方式は連続住宅の上流並みの出費を必要とした。より下層ではテナメント方式が生れた。郊外へ移住したあとの中産階層の住宅を1～2室のアパートに改造し，新移民や貧しい人々が利用した。その周辺の通りはまもなくゴミや灰で埋まり，ニューヨーク市を先頭に清掃事業が始まるが，それは必ずしも普及しなかった。狭く区切られた1～2室に大家族が住み，大ていは水道，ガス施設はなく，そのうち階段や床は崩れてスラム化していった。上品な市民たちはこれらの地域を“貧困，みじめさ，物乞い，飢餓，犯罪，不潔，好色”の泥沼として避けるようになった。

鉱山地域，せん維工業地域などに会社の規制下に工場町が生れた。かなり清潔に作られたものもあったが，せまい通りや荒涼たる山地に貧弱に作られたものもあった。労働者の持ち家を奨励した会社もあったが，多くはひどいバラックの行列が多かった。

III.

世紀末については，Thomas J. Shlereth, *Victorian America: Transformations in Everyday Life, 1876-1915.* 1991. Chaps. 3. Housing. pp. 87-140. による。

19世紀後半期にアメリカは住宅建設ブームを経験した。富裕者のクィーン・アン型邸宅からオクラハマの田舎の掘立小屋に至るまで，ボストンの3階建てのアパートからバンガロー住宅まで，一連の新しい建築様式，建築の方法，建築材料が現われた。住宅用建築は全建築の60パーセントに達した。

三つの新しい住宅の型，アパート，芝土家屋，バンガローが現われた。いくつかの新しい居住区域，市街電車郊外，エスニック住宅街，インディアン居留地が現われた。建築融資協会，メール・オーダー式融資，不動産販売業が新しい住宅の購入法と販売法を生み出した。増えつつある肉体労働者層，ホワイト・カラー労働者層が郊外住宅に住むことができるようになった。下宿あるいは借間に住むか，テナメントあるいはアパートに住むか，いずれにせよ都市の住民の多くは集合的住宅に住むようになった。鉄道と市街電車の発達により，アメリカの都市，小都市はだんだん分離され始めた。家の大きさやその所在場所が社会的成功度やそれにたいする憧れのシンボルであることが意識され，目に見えるようになってきた。富裕な人々は

クリーヴランドのユークリッド通りのようにかれらだけの通りに住むようになり，シェカー・ハイツのようなエリートの郊外に住んだ。一方，労働者階層の居住地はそれとわかる形状をとり始めた。

そしてアメリカの家はその大きさや位置の違いや住民たちの富裕度や仕事の種類に拘らず，その内部が変った。ホールや台所，客間などの場所はこの時期に何度か変った。浴室はまったく新しくなった。ポーチ，芝生，庭が広がったことは，家の維持と家庭内のリクリェーションに新しい習慣をもたらした。

農村の家

普通の農家としてはＩ型（各階２部屋，２階建て）が中部大西洋岸から，南部北部およびユタ州までに見られた。十字型（４～８部屋）はこの時期にポーチがつくようになったが，全国各地に見られた。その他ショット・ガン型（矩形），フォア・スクェア型（正方形），ホームステッド型が，かなり立派なものから貧弱なものまで見られた。多くはイギリス農村型を源としたが，ショット・ガン型は西アフリカから黒人大工によってもちこまれたものであった。南ミネソタからテキサスにかけてソッディー（土の家）が見られた。一つの部屋，一つの窓，一つのドアで壁も屋根も土で塗られた。東ヨーロッパが起源であった。ソッディーに住む前一時的にダグアウトが利用された。渓谷や丘の側面に掘られた四角の穴の家で，料理は普通戸外で行われ，ときに陥没するという危険なものであったが，その安価さのゆえに数は多かった。

都市の家

都市の安価な住宅はコテッジと呼ばれた。労働者コテッジ laborer's cottage と呼ばれたものは600ドルからあり，より安価なものであったが，いくつかの型があり，アン・クィーン型と呼ばれた上質のものは７室を具え，1900ドルを要した。一般に労働者は個人住宅を望み，1890年から1930年に全国の都市で個人住宅に住む人の比率は56～80パーセントであり，３家族以上が住む集合的住宅が20パーセントを超えた都市は稀であった。労働者のコテッジ型住宅はとくに80年代以降，建築雑誌，住宅計画法，メール・オーダー・カタログで広告された。これらを売り出した会社は“原型”を示し，それを註文する人が若干の修正の註文をつけて家のプランが決められた。価格は500ドルから3000ドル（２部屋～12部屋）で，シアーズ・

ローバック・アンド・モントゴメリー・ワード社の他いくつかのそれを扱う大会社が現われた。註文したあと買主は郵便で建築方法や保証書を受けとり，材料は鉄道で届けられた。実際の建築は3万ほどの部品を組み合せることで，手間は従来の大工の仕事の半分位であり，素人でも組み立てることができた。この“インスタント・ハウス”は20世紀に入るとバンガローと呼ばれる型が主流となり，この流行は1920年代まで続いた。この型は中産階層，労働者層の住宅の主流となったが，その特色は広い，勾配のゆるい屋根と広いポーチであった。かつてのホールやパーラーは姿を消し，リヴィングとダイニングが一つになってきた。この型は元来ロサンゼルスで流行したものが東部へ逆流したものであった。

郊外の発展

1830年代の“歩く都市”は変化して，世紀中葉には鉄道郊外の時代が現われた。初期のニューヨーク市のブルックリンやスタテン・アイランドなどのフェリー郊外が上流・中流階層の住宅地となる傾向は鉄道駅を中心とした鉄道郊外を生み出し，この両者による郊外時代が一応1880年代までにでき上った。郊外に家を建てるのに必要な出費と当時はまだ高価であった通勤運賃（と通勤時間）のため，郊外は最初富裕者の住宅地になっていった。エレクテチック・マンスと呼ばれた広さと深さと拡がりを兼ね備えた，富と成功を象徴する邸宅の列が並び始めた。それらは徐々に家族員のリクリエーションと休養の場所としての性格を強めていった。この郊外住宅地域には低所得者層も必要であった。女中，女家庭教師，洗濯係，庭園師として働いた人々は，鉄道駅の周辺に住んだ。それをとり巻く形で富裕者たちの家が並んだのが鉄道郊外の典型的な姿であった。この鉄道郊外と都心部を埋める形で市街電車郊外が発達した。そこは質素なコテッジやバンガロー型の住宅の地域となった。そしてそこにはアパートも数多く現われた。ニューイングランド地域に多かったトリプル・デッカー型はその典型であった。それは各階に1家族が住み，優雅とはいえないまでも広さにも余裕がある住宅街であった。南カリフォルニアにはバンガロー住宅地が，その他の地域にはホームステッド型などの住宅地が現われた。

労働者たちが自ら住宅街を作り出した場合もあったが，会社町 company town も各地に生れた。シカゴのプルマン市に代表されるように会社経営者が管理したものが多かったが，プレハブ型住宅を利用したものが多かった。インディアン居留地が定着するとともに，政府の手によるインディアン住宅地作りが行われた。これは

学校，教会から，食事供給に至るまで白人の管理によったものが多かったが，インディアンたちは先祖伝来の自分たちの生活の方法に固執し，二重生活を行った場合が多かった。

建設請負業者，分譲地開発業者

バルーン・フレーミング方式は住宅建設請負業者と開発業者を生み出した。従来の伝統的方式に代って大量生産された釘で標準規格の柱，梁，たるきをつなぐ方法が主流となり，労働力と材料費が節約されて建設費用は半額に近くなった。大工は入札によって住宅建設を請負うようになった。石工，左官，煉瓦工，ペンキ屋，そして1880年代以降は配管工（熱湯，暖房），電気工などがその下請として働いた。木工作業は初期は蒸気機関，のちにはモーターを動力として現場ではなく，製材所で行われた。3～4軒の家を請負う小規模業者も多かったが，数千軒を請負う大業者も現われた。広告が大規模になり，価格競争も激化した。持ち家指向は富裕者層から中産階層，そして下級階層へ拡がり，黒人系，ヒスパニック系，アジア系を除いて社会の全階層がそれぞれの資力に応じた家作りに参加した。このため，悲惨なほどの住宅資金作りの努力が下級階層では見られた。

建築融資協会

B & Ls（Building and Loan Associations）として有名になる建築金融組織が登場した。家の希望者が月々積み立てをし，一定額を支払い，建築計画ができ上ったところで建設し，残額を B & Ls が融資する仕組みであった。これは家の希望者に郊外の土地を斡旋し，家の建設計画を教え，そして融資した。この制度を利用したのは定額の収入があった熟練労働者層であった。収入額が安定しない日雇い労働者，一時雇い，農民たちは一般にこれを利用できなかった。この制度は19世紀末から20世紀に大成長するが，トラブルもともに増えた。かなりの中途破産者（たとえば1890—94年にカンサスだけで11万人が破産した）が生じた。

下宿，貸間制度

19世紀にはかなりの上流住宅でも下宿が見られた。中流階層では寡男や寡婦がしばしば下宿人をおき，若い男女が下宿することは一般的風潮であった。労働者層は副収入をえるため部屋を貸したり，食事を供した。世紀末にはこの傾向は広ま

り，多くの労働者の妻は下宿人の食事を作ることで副収入をえた。1夜20セントから40セントの安宿も増えた。ざこ寝でつめこまれる方法で，不潔な寝具で間に合わされ，時間別の交代制のものもあった。冬だけ開業するものも多く，一時的，移動型のものもあったが，いずれもかなりの収益を挙げることができた。

テナメント（安アパート）

倉庫，工場，醸造場，一般の工場が南北戦争後の時期に複数の家族の住居に利用された。これらの建物を壊したあとに新しいテナメントが建てられた。これらを一括して説明するのは難しい。テナメントとアパートという語はしばしば混同して使われたが，いずれも3家族以上が独立して住んだものを意味した。これらは郊外や小都市にも見られたが，一般に個人的な衛生施設をもったものがアパートと呼ばれ，共同の配管施設をもったものがテナメントと呼ばれた。テナメントには，大都市の中心部に，のちに商業もしくは製造業に利用する前に，一時的利用のために投機業者によって建てられたものがあった。1部屋か2部屋単位で貸し出されるこの方式はとくに大都市で労働者たちや新しく到着した移民たちに利用された。その不潔さと混雑が非難される雰囲気のなかで，1879年にニューヨーク市で地主側と借家人の双方を満足させるテナメントのモデルが公募され，地主側の7パーセントの利廻りと借家人側の適度の照明，防火，換気，衛生の要求の妥協としてジェームズE.ウェアの“ダンベル”方式が採用された。4～6階建ての100フィートと25フィートの矩形の建物に2本のエア・シャフトがついたこの形式は，現実には換気，防火が不充分で，ゴミの山と火事の頻出を招いたが，当時としては一応地主側と借家人側を満足させたことから1901年に州令によって禁止されるまで続いた。

もっともこれはニューヨークのイースト・サイドだけに見られた方式で，同じような3階建ての各種の多家族用住宅が全国の各都市で見られた。

アパート

南北戦争直前ボストンで始まったフランスから伝わったアパートは，戦後アパートメント・ホテルと呼ばれ，大食堂，ルーム・サーヴィス，蒸気洗濯機，メイドを備え，ホテル並みの設備を誇った。さらに熱湯，浴室，台所，電話を備え，80年代には電気の照明などが導入された。最初は水力による，のちに電気によるエレベーターの導入は高層化を可能にし，世紀末には20階に達し，中産階層の女性たちの

憧れの的となった。より程度の低いアパートも現われた。メードのサーヴィスのない，1室から3,4室のものが各都市の市街電車郊外に並んだ。世紀の変り目ごろから1室の，折りたたみ式のベッドや組み立て式の家具を備え，包装された食品類や簡単な料理に頼る機能的な，小さな台所を備えた新型のアパートが西海岸から登場し，東部地方へ拡がっていった。

水と廃物

1915年ごろには中産階層の家は迷路のようなパイプ，電線，送水管，ケーブル，導管，本管に繋がれていた。熱，光，動力，下水処理などは新しい公益事業に頼るようになり，家庭生活の内容も変化した。貧しい人々より金持ちたち，農家より都市の住人，南部や西部の人々より東部の人々がより早くこれらの恩恵に浴した。1870年代には新鮮な水を家庭内に運びこむ仕事，汚れた水や生ゴミを家の外へ運び出す仕事は女の人や子供たちの日課であった。もっとも1915年になっても家庭内に水道施設をもたない農村や都市の家庭は多かった。農村家庭では水路やタンクや雨水桶からバケツで運んだり，井戸からポンプで汲み出したり，風車によるタンクから運んだりした。都市の人々は水運搬車，テナメントの庭の給水口，玄関の蛇口などから水を手に入れた。

消費者の要求よりむしろ公的な健康上の危機が水道施設を発展させた。1790年代の黄熱病の流行がフィラデルフィアの水道施設を始めさせたが，1870年代までに大都市はいずれも何らかの水道施設を備えていた。田舎の小都市はいずれも丘の上に給水塔を備え，木製，鉄製，鋼鉄製のパイプが各家庭に通じていた。

下水設備はかなりおくれた。1850年代まではそれはほとんど見られず，1880年代に暴風雨時の排水から改良が始まった。清掃業者や農夫と便所からの排出物を処理する契約を結んだ人々もいた。裏庭，表通り，暴風雨用の排水路，空地に汚物が放置されている場合も多かった。都市の住宅に水洗便所が導入されたことが事態を悪化させた。

熱と照明

19世紀を通じてアメリカ人はその家庭を暖め，料理をするためのさまざまな方法を検討した。1840年代に現われた鋳鉄の客間用のストーヴと台所のレンジは世紀を通じてさまざまの発展をした。辺境地方では暖房のためマメ科の茎，トウモロ

コシの穂軸から牛の糞まで燃料に適したものは何でも利用された。のちにはこの地方にも石炭が運ばれるようになったが，東部では早くから無煙炭か瀝青炭が利用された。かなりストーヴが普及したにも拘らず，オハイオ河，ミズーリ河以北に住むアメリカ人たちは，20世紀初頭まで11月半ばから4月半ばまでの間室内でも寒さを辛抱しなければならなかった。台所や客間にはストーヴが入っていても，それ以外の部屋や3階以上は寒いままだった。従来中産階層のものであったセントラル・ヒーティングが労働者階層の間にまで拡がったのは第一次大戦後であった。洗濯機が地下室に登場するのも同時期であった。19世紀を通じて月曜日は女の人すべてが恐れた洗濯の重労働の日であった。裏庭，洗濯室，裏玄関，台所などで女の人が洗濯する姿が見られた。徐々に地下室の洗濯機の時代が訪れた。

照明も南北戦争後，徐々に改良された。ガス，石油，電気などの技術が導入されていくが，農村では各種のろうそく，各種の油のランプが使われ続けた。灯油ランプの時代のあと，ガス・ランプ時代がくるが，これも大邸宅や街路から始まった。1879年のエジソンの電灯の発明のあと，ガス灯と電灯の競争の時期を経て20世紀へ入って電灯だけの時代に入っていった。ガスはストーヴ，レンジ，湯沸器でも使われた。灯油は店で買わなければならず，石油，木材は配達が必要であった。ガスと電気は一度配管すればあとはその必要がなかった。電気は煤が出ず，換気の必要がなかった。家庭生活は変化した。電気，水道，下水設備，電力などは公益事業に頼ることになり，“組織”が家庭内に入りこみ，同時にどの家庭にも同じサーヴィスが導入されるという均質化現象が生じた。ホテルやレストランで始まった近代生活が各家庭に普及していった。

家の空間，広間と客間

19世紀後半期に標準的な家の間取りが変化した。とくに広間 hall と客間 parlor が変化した。70年代は広間と客間の時期であった。広間は表広間 front hall と裏広間 back hall に分れたが，これは家の前半部の客を接待する表の間と後半部の家族員の居住区とに二分されていたことを反映していた。表広間には当時独特の hall stand（帽子，上衣，傘の置き場所）名刺受けなどが接客用に備えられ，それは家のなかの一番豪華な客間 parlor へつながった。そこには装飾用の家具や炉が備えられ，その上に骨董品が並べられた。上流，中流の家庭では席順などかなりの儀礼が見られ始めた。移民の家や農家でもそれなりに表の間を備えようとする

努力がなされた。ダグアウト住宅ですらオルガンや磨いた棚で部屋の一部を客間にしようという努力がなされた。この接客を重要視する傾向は家族員の生活を犠牲にする面があった。客間はたまにしか使われず，家族員は裏の，暗い，粗末な部分で生活しなければならなかった。1880年代のグレンジャー運動の一部として，形式ばらない家が唱導され始めた。90年代には建築家，ジャーナリスト，社会改良運動家たちも客間の廃止を唱え始め，代って衛生的，機能的，単純な居間 living room を中心とする家がもてはやされ始めた。接客よりも家族員の居心地の良さが重要視され始め，“進歩的家庭”とされたこの方向への転換は20世紀初頭まで続いた。

この背景には工業化の成果が家庭生活にとり入れられていった結果生じた変化があった。牛肉が安価に買えるようになったことから食事の中心的存在となり，食料加工と冷凍輸送の発展の結果，果物と野菜が一年を通じて利用できるようになり，このような食生活の変化は能率的，衛生的な住居環境を可能にした。

そして個室などの形で家族員の独立した生活が実現し始めた。労働者階層でも部分的ながらこれらの変化が受け入れられた。

台　所

これまで家の背後にあった暗い，せま苦しい台所は，より陽のあたる，機能的な場所に変っていった。従来の鋳鉄製のストーヴやレンジは，より小型の，軽い，鋼鉄製に変った。温水ヒーターも登場した。配達される氷によるアイス・ボックスも80年代に普及した。従来の棚に並んで悪臭を発していた保存食品類が姿を消した。

浴室と寝室

第一次大戦後，浴室は浴槽，流し口，トイレットをもった特定の場所に発展した。それまで浴室は地下室，台所，物置小屋，ときには寝室と色々な場所を移動して廻った。便所は初期には一般に戸外にあり，排出物処理の方法，水道設備，下水設備の改良とともに徐々に戸内に入り，浴槽とトイレットが一つの場所に集中される方式にまとまっていった。労働者階層の多くは個室の寝室は利用できず，トイレットは自宅内にあるが浴室は共同，あるいはその逆という場合が多かった。寝室は各階層によってさまざまであったが，たとえば子供部屋は，中産階層の場合，従来のゆりかごに代る木材あるいは金属のベッド，子供用の椅子，子供部屋らしい壁紙をもった独特の部屋に変っていった。

日常の家事労働

当時の家事労働は，まだ家庭内召使が広く残っていたことからわかるように，かなり多かった。石炭を室内で利用したことから，煤や燃えがらの掃除を日常的にする必要があったが，年に2～4回の大掃除も必要であった。石炭を使うことはその火起し，灰の除去，石炭運び，ストーヴ磨きを伴った。廃物，屑物，洗い水は人手で戸外まで運ばなければならず，掃除も週2回は欠かすことができなかった。その他パン焼や料理も加わって，当時の主婦はかなりの肉体労働を負担しなければならなかった。80年代のじゅうたん掃除器の導入をきっかけに，機械化が家庭内の労働を徐々に軽減し始めた。70年代からペンキ塗りが普及し始めた。家全体は4～6年に1回，部分的には毎年ペンキを塗りかえる習慣になっていく。ペンキ製造業の発展とともに，多様な色のペンキが登場するようになり，アメリカの住宅の外観は一変するが，これは一面では家事労働に一分野が増えたことを意味した。

家の外側，ポーチ

18世紀以来の南部の家の伝統であったポーチが19世紀後半期に全国に拡がった。それは家の外と内の境界地域として，子供の遊び場所，老人の憩いの場所となり，植物でかざられ，鳥かご，揺り椅子，ハンモックが置かれた。

芝生と庭園

1870年代に登場した芝刈機は家の前面に芝生を植える習慣を普及させた。芝生の普及はクロケットを流行させ，また憩いの場所としてそこには鉄製の椅子や長椅子が置かれた。花壇も色々な形で登場するが，キャベツ，トマト，いちごなどの家庭菜園も流行し，それは労働者階層では実益も兼ねたことから不況時に流行した。農村部では芝生よりも木を植えることが流行し，都市部でも各地で植樹クラブが生れた。これには当時各種工業が自然を破壊していくことにたいする反撥の意味もあった。

まとめ

以上19世紀の初期，南北戦争直後の時期，世紀転換期の住宅の概要を見て，そのなかから大きな傾向を読みとりたい。

第1に，農業社会から工業社会への変化が，徐々にではあるが明確に読みとれることである。農村人口に比べて都市人口の比率が高くなっていくことから，都市住宅が主流になっていくわけであるが，直接的に建築の方法がバルーン・フレーム方式の発達によって，従来の大工や農民の手仕事から大工場のなかでの建築の方向へ進んだことは，その単価を安価ならしめただけではなく，合理的，機能的な住宅建築，そこに住む人々の省力的，合理的な生活の方法において決定的な意味をもった。1家族が独立の家屋をもつ傾向は着実に進んでいった。世紀前半に見られた数人が1部屋で過す習慣は貧困者層を除いては姿を消し，子供までもが個室をもつ傾向に変ったし，下宿や貸間もアパート方式に変った。水道，下水道，石炭ついでガス，電気の導入，食料調達の方法を含めて料理の方法が変ったこと，それらから生れた家事労働の減少が以上の住宅近代化の背景であった。世紀中葉に見られた客間重視の風潮が家族員重視の風潮に変っていくのも全般的な生活水準の向上が背景であろう。

第2に，世紀前半期にはまだそれほど明確でなかった階層別の住宅の差がはっきりしてきた。上流階層のマンション，中流家庭の一戸建住宅，下層階層のテナメントなどの差は決定的なものとなっていった。これはアメリカ社会の各階層の発展をそのまま反映したと考えるべきで，工業化によって富を蓄積していった層，工業化のなかで新たに必要とされた各種専門職を担当した中産階層の登場，そして工業化とともにますます必要とされた労働者の大群，そしてそのいずれにも入れないで社会の底辺に沈澱していく脱落者層のそれぞれが自らに適した住居，生活の型を作り出していったのであった。

全体としては，地域的，階層的差異を含みながらアメリカ社会の近代化が進むのであり，一般に富裕者が先導して貧困者がこれに続き，北東部が先導して西部，南部がこれに続き，都市部が先導して農村部がこれに続いたのであったが，これらの間の差異は依然として残り続けた。とくに都市ではますます富を蓄えていく富裕者層と，社会の底辺にとり残され，生活を改善することができない貧困者層との差はきびしいものになっていった。これは郊外化，地区別の住み分けを必然化するのであり，現在アメリカの都市問題の原型がすでにこの時期に形成されていたと言える。